

## シベリア抑留記

熊本県 園 田 博 之

昭和十七（一九四二）年六月、徴兵検査で甲種合格。私は海軍を希望した。入団は前期と後期で、前期は十八年の二月、後期は八月であった。私は後期の八月十日、相の浦海兵団に入団した。再度の身体検査があり、翌日、各学校に行く希望者はいないかとのことで、私は信号兵を希望しテストを受け、早速横須賀海軍航海学校に入校した。普通科信号術練習生の教課は、手旗信号、ラッパ吹奏、発光信号、旗旋きりまわし、軍艦及び飛行機の識別、見張り、気象で、特に発光信号には昼夜を分かつ月火水木金の猛訓練で、心身共に鍛えられた。その勉強に歯を食いしばって頑張った。

翌十九年三月、卒業前になって教班長より、頭髮と爪を切って家に送りなさいと言われた。

そして第一希望と第二希望があり、艦と陸戦隊を希

望した。ところが佐世保海兵団に転勤となり、一週間滞在し、大分航空隊、朝鮮元山海軍航空隊分遣隊に転勤になり、それから一カ月間ぐらいい大分航空隊に勤務し、元山海軍航空隊に転勤した。元山航空隊はアメリカ軍、ソ連軍の爆撃もなく、平穏であった。

元山は零戦の練習航空隊で、若い搭乗兵達の飛行訓練は熾烈を極め、私達はその飛行訓練には驚くばかりであった。戦雲急を告げ、日に日に日本軍は追い込まれていく。この若き搭乗兵達は短期間で慌ただしく訓練され、特攻隊として出撃して行った。

昭和二十年に入つての沖繩戦になって、昨日も六機、今日も六機と飛び立ってゆき、沖繩方面の空に散つていった。その特攻兵達は、明日はいよいよ出撃となると、その夜は別れの宴で歌まじりの大変な騒ぎだった。いよいよ出撃となり、特攻兵達は純白に日の丸を染め抜いた鉢巻をきりりと締めて広場に整列し、将校と後に残る同期と別れの盃を交わし、整備兵が零戦にエンジンをかけると愛機の零戦に向かって駆け足で乗り込む。その時の若き特攻隊員の心境は、きっと

故郷の父母、家族、友人への訣別の思いであつたらう  
と思う。

ものすごい爆音となり、一機、一機と飛び立って行く。零戦は航空隊の上空を何回も旋回し、きれいに編隊を組み、二度と帰ってこない若者達は空の彼方へ消えて行く。私達はその武運を祈ると同時に、胸の中で手を合わせ、豆粒ほどに小さくなくてもその零戦の姿へ手を振っていたことを忘れない。

昭和二十年八月十五日、日本は降伏した。天皇陛下のお言葉を聞きながら、その時の無念の涙と深い感慨を思い出す。朝鮮兵は即時解散となり、そのうち、庁舎の屋上の見張員から、軍艦二隻が元山の港に向かつてくると報告があり、私も早速屋上の上って見ると、やはり元山の港に入った。我々日本軍は、飛行場の外部に小銃を持って守備についた。時間がたつてもソ連艦からは何の応答もなかったので各人引き揚げ、兵舎に帰り、日本に帰る思いで自分の衣囊に持てるだけ詰めた。とたんに総員集合がかかり、航空隊全員、着の身着のまま外に飛び出した。全員整列したとこ

ろ、六、七人のソ連兵が自動小銃を構え隊員を取り囲み、また数十人のソ連兵が怒涛のようになだれ込んできた。捕らえられた航空隊全員は元山の町をぞろぞろ引き回され、韓国人達に、捕虜になった我々日本兵の惨めな姿をさらされ、そのまま元山の「港女学校」に三日間ほど閉じ込められ、また夕方になって航空隊に連れられて行った。兵舎に行つてみたら、外の部隊が来たらしく、兵舎は荒らされ、自分の衣囊に詰め込んだ衣類も散乱しているので、また拾い集めて衣囊に詰め込んだ。

その晩は隊員は外部に出るはならぬと指示があり、私達信号兵三人、電信兵二人は将校庁舎に寝ることにした。夜中になって若い電信兵（十六歳）が、忘れ物をしたから取りに行つてくると言つて出て行った。帰つて来て話したことは、途中は匍匐で行つた、行くとき自動小銃で撃つたが当たらなかつたと言つた。若い少年ではあつたが、大胆な者だつた。

翌朝になり、総員集合で衣囊を担いで出た。多くのソ連兵が日本兵の隊列につき監視し、どこに連れて行

くか分からず、ダワイダワイと追い立てられ歩き続けているうちに空腹と疲れて、担いでいる衣囊の衣類も捨てざるを得ず、空腹と疲労困ばいで倒れた落伍者も多く出て、次々と自動車に乗せられ、北鮮の元山から北鮮の興南の捕虜収容所まで行った。そこで一カ月くらい収容された。この収容所は警戒が厳しく、ただ収容されただけであった。

そのうち興南の港で、いろんながらくたを積んだ貨物船に乗せられて、早朝ウラジオストクの軍港に着いた。軍港には数十隻のソ連軍艦が不気味な姿で停泊していた。

船を降りた私達はまた早朝から歩かされ、十月上旬ではあったが、辺りは真っ白く霜が降って雪のよう

で、銀世界。それが身に痛くしみたのを覚えていた。歩き続けるうち空腹と疲労でふらふら、ダワイダワイと追い立てられて皆の後に続いて歩く。結局私達は「スーチャン地区収容所」に収容されることになった。

翌朝直ちに体の検査があり、一級から三級まで各自に労役が割り当てられ、私は石炭作業の仕事であっ

た。炭坑は二カ所あって、二十五番炭坑は横坑、二十六番炭坑は縦坑であった。私は横坑の労役となり、その炭坑の作業の往復には番兵が左右前後につき、夜は軍用犬を後ろにつけ、ワンワンと吠え、噛みつかんばかりに接近し、三十分くらいかかる距離を駆け足状態で毎夜往復したものである。

「カンテラ」を持ってソ連人について初めて坑内に入り、坑道を歩くと、レールが敷かれてあり、いっぱいになったトロッキュ五、六台、暗闇の中を馬が引張ってくるのを見て驚いた。その馬にはソ連人がついていた。

坑内での石炭作業は、幾つもの悪条件の重なった重労働で、落盤、ガス爆発、ガス充満、汚れた地底の炭塵の空気です。ソ連人について奥へ奥へと行き、少し広い場所で止まり、作業配置に分かれるための話のとき、私の体を誰かが引っ張ってくれた瞬間、ボタ（石）が目の前に落ちた。誰かが引っ張ってくれたことで命拾いしたのだ。

それから毎日、ソ連人が採掘した石炭を我々が搬出

機に入れる仕事が続いた。あるときは石炭の層が七〇センチくらいなので、低くうつぶせになって、朝から夕方暗くなる交替時まで、一日じゅう搬出機に入れる労働が続いた。ノルマも上がるはずはありません。

食事は、コウリヤンのような穀類のどろどろしたもの、縦一〇センチ、直径六、七センチくらいのソーセージの空き缶一杯と、パン三五〇グラムであった。

炭坑作業には特にノルマが課せられていた。二十一年の中旬ごろになって、石炭生産量も一〇〇%を超えるようになり、パンも増えた。でも、これまで激しいぶっ続けの重労働で、子供にも足りない、これだけの食事では体力の維持ができるはずはなかった。二十一年十二月三十一日、明日は正月というのに、昼の仕事で帰り、また夜勤の交替で、普段の食事にジャガイモ五切れほど付け加え、その五切れの中にも黒く腐ったものがあるが、それも食って夕食を済ませ、また仕事に行った。二十四時間ぶっ続けの重労働であった。

また、炭坑内だけの労働ではなく、いろんな仕事に回された。鉱脈捜し、あるときは選炭場でのポタ石選

別、あるときは石炭の貨車積み込み、我々にとっては空腹と疲労で重労働である。鉱脈捜しは、各人、大きなツルハンを担ぐ者、またスコップを持つ者、山の斜面を縦一・五メートル、横一メートルを掘る者で、仕事の往復には途中、道路沿いにタンポポやヨモギなどがあると、激しい監視の中、誰しも列からはみ出て採ったものであった。その鉱脈捜しも私達は数日間、後はどうなったかわからない。また炭坑場にはソ連の女性が二人いて、その他は我々日本人五、六人で、ベルトコンベヤーを流れてくる石炭の中のポタを拾い、トロッコいっぱいになるとポタ山に捨てに行く。そのポタ山には何カ所となく煙が出ていた。酷寒の季節であり、その煙の出ている所に行って体じゅうを温めたい気持ちであったが、それができず、肌身を針で刺すような寒さの中、一日じゅう立ってのポタ石選別。ポタ山は上り坂になっており、鳥居のような桁に線路を敷き、それに狭い板を敷く。線路も板も凍結しており、三人で押して行きトロッコを返し、帰りは棒を持ってブレーキにしたものだが、ブレーキもあま

りきかず危険な労働であった。この仕事も数日間であつた。また、あるときは貨車に石炭を積み込む仕事で、人数は何人で積み込んだか分からないが、七、八人だつたと思う。「貨車二台積み込んだら終わり、ダメイ」と言うので、我々はその気持ちで、自分のできる限り精いっぱい力を出してのスコップでの貨車積みで、体もぐたぐた疲れてしまう。スコップでの仕事は元氣なときでも重労働である。

積み込みが終わるとまた貨車を持ってくる。何回となく嘘をつき騙すので、日本人監督は腹を立て、「皆、いい加減に身を動かしておれ」とのことで、時間がくるまで働いたものであつた。この仕事も数日であつたと思つている。

それから再度坑内労働となり、空腹と疲労と重労働で、食うことと生きることだけしか考えない。飢えと戦いながら一日一日生き延びるのが精いっぱいであつた。日数がたつにつれて、私達の体力は確実に衰弱していった。二十年の暮れから二十一年の冬になって酷寒の中、栄養失調と過酷な重労働と飢えにあえぐ私達

の収容所の中から死亡者が多くなり、二、三日前までいた者が今日もう死亡していかない。朝整列していると倒れて運ばれる者、また私の五、六人後ろの上段の寝台にいた戦友が、夜中に苦しうなうめき声を出していたやうで、朝起きたときにはもう既に息絶えていた。夜中のことで誰一人として声をかけてくれる者はいなかったやうであつた。

多くの戦友が栄養失調による下痢症状を起こし苦しんでいても薬はなく、消し炭が薬代わりであつた。そして虱は繁殖し、一年も二年も着たままの黒光りする衣服の襟首や背中を、大粒の虱がぞろぞろはい回つていた。取つても取つても虱は減少せず、後ではその虱を取る氣力もなくなり、虱のなすがままの毎日であつた。毎日毎日、尊い命を失つた戦友達は、屋根もない白々とした厚い雪の上に並べられていた。その戦友達は死ぬ前にほとんどが、はるか我が故郷の父母や家族のことを思い、その中で「お母さん」と言つて息を引き取る者が多かつたやうである。この収容所でも、はつきり分からないが、一冬に二百人余りの戦友が死

んでいったと思う。そして、亡くなった戦友の名札を病室の棚に置くと、ソ連の将校の手によって、不必要になった物でも処分するように簡単に捨てられていたとのことであった。

その光景を見ながら、私達はソ連のその冷酷な振る舞いに激しい怒りを覚えた。その当時私は二十四歳の若者であったが、しかし食料欠乏には勝てず栄養失調、下痢を起こし、生死の限界までできてしまい、このシベリアの広野の凍土に死んでしまうのではないかと思い、炭坑仕事から帰っては、毎日毎日、日本の軍医に診察してもらい、そして、軍医のお蔭で休養となった。亡くなった戦友の埋葬は、病気で休んでいる者ばかりであった。私も長い鉄の棒を持って、日本人の墓地となつている小高い丘の凍土に戦友の亡骸を埋葬に行かされた。私は歩く気力もなく、ソ連兵に追い立てられふらふら歩きながら、ふと頭に浮かんでくるのは、自分もこのシベリアの荒野にこのまま死んでしまうのではないかという思いで、疲れた体に強くしみました。

また、遠い故郷の父母や家族たちが頭に浮かんで、私の心に悲しさが広がり、涙がとめどなく流れてしまいました。身も心も弱っている私達病人は、何か所となく、こちこちと堅い凍土を浅く掘り、二、三体重ねて葬り、墓標を建てながら、この帰らぬ人となった戦友達のためにも、今、生き残っている者はどんなことがあっても生きて帰り、この状況を家族や日本人に伝えなければならぬと自分に誓い、私は強い覚悟を胸に秘めた。「必ず帰る」という思いは、厳しい寒さと過酷な生活に、ともするとくじけそうになる私を励ましてくれた。

だが、私もいつ死ぬかわからない状態で突然「ダメイ」と聞いたときは夢のようで、生きて帰れる嬉しさと喜びは筆舌に表すことはできないものだった。

昭和二十二年八月、私達の収容所の中から、私を含めてわずか六人の者が、まず第一回目の引揚者となつて故国の土を踏むことになった。そのときの帰れることの嬉しき、喜びと、残る人達と別れる愛惜の念が私の心を強く揺さぶつたものです。

私が帰国になったのは本当に不思議で幸いであり、帰国できたのは、きつと軍医さんのお蔭ですが、その軍医さんの住所も名前も分かりません。命の恩人でありました。今なお、感謝申し上げます。

忘れることのできない昭和二十二年八月十五日、父母、家族が待ちに待った我が家に無事に帰ることができました。

思い出せば、強制抑留こそ、事のいかんを問わず、私達が受けてきた肉体的にも精神的にも限界まで追い詰められた生き地獄そのものである。人間でない扱いを受け、痩せ衰え、苦しみ倒れていった戦友達の面影、あれから五十余年の歳月が瞬く間に流れた。しかし、筆舌に尽くしがたいあの苦難は、決して長い歳月が流れても消すことはできない。

終戦後五十余年たった今日、平成六年、熊本県菊池郡西合志町農業公園にシベリア抑留慰霊碑が建立された。やっと私達の受けたあの惨劇が、世間に受けとめられるようになった。

シベリア戦没者の霊のご冥福をお祈りいたします。

#### 【執筆者の紹介】

園田氏は大正十一年生まれで、昭和十八年八月十日、相の浦海兵団に入隊。終戦時、朝鮮元山航空隊に所属しておられたので、記述の通り、ソ連沿海州スーチャン地区に抑留され、炭坑の労働作業に従事され、栄養失調症により、昭和二十二年八月十五日、遠州丸にて舞鶴港に上陸、帰国されました。

以来、後遺症のため、家業の農業もままならず苦労されましたが、生来温厚誠実な方で、村人の信頼も厚く、村の役職でいろいろとお世話をしておられました。私が知り合ったのは、市報に「抑留記」を投稿しておられましたので、この度県連より「抑留記」の依頼がありましたので、地域社会に苦労話を披露するにとどまらず、全国規模の『平和の礎』への投稿をお願いいたしました。最初はに cand おられましたか、  
「以前の手記を全国の皆さんにお知らせする気持ちで頑張ってください」とお願いしました。規定の半数くらいになって体調をくずされました。私が『平和の礎』に寄稿した文を読んで、岩手県山

田町在住の伊藤末男様より戦争中のことで問い合わせがあり、この本が全国的に配布され、歴史の証言としての役割を果たしていることに感心して、深謝する次第です。

私達のこの証言こそが、次世代の人が良く理解して、世界平和と国家繁栄に寄与して下さることを確信して、制作担当の皆様方の健康と御多幸のもと、ますます発展的に推進していただくことをお祈りする次第です。

(熊本県 本田 正行)

## シベリア抑留記

愛知県 杉浦 守 市

四十五区 (ソーロクベアチ 数字の四五)

作業が始まった時は二組と呼称されていた。程なく四十五区となり、昭和二十二(一九四七)年になって四十四区と変更された。ドイツの捕虜によって建築が

始まり、交代して日本人が造る建築現場であった。二階建てのブロック建築だ。職業別に大工、左官、電気工、建具職、鍛冶屋、石工、雑役等の職種が集まり、一五〇人くらいが作業をしている。一番多いときには三〇〇〜四〇〇人が作業をしていた。

六中隊はカーミン(石炭ガラとセメントを混合し圧縮して蒸気乾燥したもの)積みが主とした作業で、特に二小隊が担当していた。一小隊はトロッコでカーミン、木材等の運搬。二小隊は石工、左官等の補助としてカーミン・セメントを手元まで運び積みやすくする。三小隊はペント打ちと各種の雑作業。二中隊は大工、建具職で、六中隊が仕上げた外壁、間仕切り壁等の内装を家としてまとめ上げる。

そして一中隊の左官がカーミンの上塗りをする。五中隊は左官のセメント練り。三中隊は基礎工事、各所の整理等、土木雑工事が多かった。

カーミン積みの監督兼職人でトルコ人が直接の作業に関係した。

エフレム爺、セミニヒ、ダグラスコーク、アレキ